

五行歌

秋 山 昭 子

(藤沢日曜歌会)

コロナに用心
暑さに 用心
詐欺に 用心
色々用心多し
シニアの暮し

浅 野 征 子

(藤沢火曜歌会)

年齢のせいにはしたくない
でも 年々おちていく
能力というもの
「いつか分かる時がくるよ」
母の日に思う 母の言葉

新 井 奈 々 草

(藤沢火曜歌会)

ひとときわ
明るくなつた
障子の張り替
その白さに励まされる
年の暮れ

飯 田 敏 一

(藤沢火曜歌会)

炎天下
汗ふき 黙々と
家庭ゴミを車に積み込む人達
手際よい動作
「ご苦労さま」と声かける

石川 トシ

(藤沢火曜歌会)

いわき やすお

オーガンジーの

翅の薄さよ

赤とんぼ

秋草に

休む

短気をおこし

はじめて飛んだ

鳳仙花

赤い晩夏と

白い仲秋

(藤沢火曜歌会)

石松 いさを

(湘南五行歌を楽しむ会)

牛島 芳一

(藤沢火曜歌会)

今夜も清酒を一合

温めるのは電子レンジ

温度設定を四十五度に

適温に仕上がって

楽しいひと時となる

ふわふわ むくむく

気持ち良く

季節を乗せて 雲はゆく

大空の庭を

はるばると

遠藤 由里

(藤沢日曜歌会)

10月半ばを過ぎても

きりりと晴れぬ

鈍色ぬぼろの空を見つ

年老いた夫の

冬支度を急ぐ

大川 せい子

気持ちよかった

ブランコの風

いつも誰かが

押してくれてた

きつと今も！。

岡本 まさ子

(藤沢日曜歌会)

歌は

繭

悲しみから守り

少し ひかりながら

私をつむごうとする

小原 美子

(藤沢日曜歌会)

ヨーヨーがしぼんだ

これは私のではないと

泣きじゃくった幼い頃

夏は終ったのよ

秋風がささやく

黒木 允

(藤沢日曜歌会)

誰もいないのに

言い訳をする

支えなしで

ズボンはけないとき

「米寿」だからと

斉藤 絹美

春の彼岸のゆきどけに

浜の石ころころ〜と

波うちきわをころげゆく

貝を拾いながら

ほほえんでみている私

鈴木 春野

(藤沢火曜歌会)

長いまつ毛に

愁い漂わせて

儂げな露草だけど

内に秘めてる

雑草魂

関根 次郎

(藤沢火曜歌会)

縁側で

茶のみ友達と

日向ぼっこ

お日様のおい

座布団のぬくもり

草庵

寺田篤弘

私は手品師

ぴーひゃらら

何でも隠すよ

ぴーひゃらら

眼鏡・約束・名前に財布

(藤沢火曜歌会)

母校の小学校へ

徒競走のゴール地点を

覚えていた

いつも四位で

いつも悔しかった

(藤沢日曜歌会)

高田明美

西田明子

遠出禁止の夏休み

「ばあば歩いて来たよ」と

汗ふく孫

椅子かき集め囲む食卓

腹ごなしは季節外れの坊主めくり

(藤沢日曜歌会)

老化が進んできて

何をやるのも大変になり

自分を叱って励ます

独居だし声を出し

「何やってんの!」とか

(藤沢火曜歌会)

橋本圭子

(藤沢日曜歌会)

コロナがおわったら

またいっしょに

あそぼうね

幼い文字の

ファックス届く

ひろこ

(藤沢日曜歌会)

自肅期間

人影まばらな砂浜を

素足で歩き

桜貝見つけ

「宝物」と中二の孫

蓮村詳子

(藤沢火曜歌会)

公園で遊ぶ

子供達のシャボン玉が

この国を

清めようとするかのように

輝きながら舞っている

松岡雅子

(藤沢日曜歌会)

紙を差し出せば

一首

書いてくれそうな

菫の集まり

楚々として

松本希雲

山口博子

(藤沢日曜歌会)

(藤沢火曜歌会)

身体は土に
たましいは
天空に帰る
永遠に輝け
いのちの星よ

暑がりだった亡^は母
墓石の上に3つ程
保冷剤をのつけてみた
墓の中から声がする・・・
「お陰で生き還るよーっ」だって

茂木知恵子

横山礼子

(藤沢日曜歌会)

(ハマ風の会 藤沢火曜歌会)

「あなたらしくていい」とは
それ以上それ以下でもない
と言う事でもあるのかな
ちよつとずるい
褒め言葉かな

カリンは固く口を閉ざし
ザク口は笑い出しそう
黒猫寝そべり
青いどんぐり落ちて
秋風すすきをゆらす散歩

与三郎

(藤沢日曜歌会)

終楽章はゆつたり静かにと

深く念じるも

時の流れが

急に早くなつたぞ

喜寿を過ぎて